

アフリカには「アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカを訪れる」という諺がある。アフリカの太平洋に落ちる夕陽は思をのむほどに美しかった。キリマンジャロが影絵になつていた。感嘆している私に案内人の黒人が「どうですか。アフリカの夕陽は素晴らしいでしょう」と誇らしげに英語で言った。「なんだよ。おまえの夕陽かよ」と日本語でつぶやくと、通訳の人がそのままを英語で告げた。黒人はにやりと笑った。私はむき

になつて「この夕陽も素晴らしいが、俺の故郷の日本の西の果ての夕陽は、もっと感えるほどに美しいよ」と言い返した。それは確かである。どこで見ると夕陽も素晴らしいが、わが故郷の夕陽ほどに素晴らしい夕陽はない。若干の感傷は混じつて

わが故郷の「夕陽」

はいるが、嘘ではない。海や山に30、40分はある近くである。四方に杭を打ってテントを張り、私たちはその作業に熱中しているらしかった。「楡は日本

晴らしい。しかし、感傷に浸る時間は備かであった。その夜もテントを張って寝なければいけなかつた。案内役の黒人は料理人も兼ねていた。野外の夕食は鶏であった。近くの村から調達してきた鶏である。近くといつても優

ていた。ふと、大木の傍を見ると2人の足の長い黒人が楡を数本持つて立っていた。「マサイ」と黒人が言った。若いマサイ族は「ルック」と英語で言った。黒人は「目を見ろな」と言つたとき、マキ料理に没頭していた。マサイ族は大木の根っこで鶏をむさばるように食つていたが、食べ終わると「うまかった。これで俺とおまえたちは仲間だ」と言つた。「守つてやる」というのである。

テントの中で目は瞑つたが、眠れなかつた。マサイ族は大木の根っこで焚き火をし、朝までべちゃくちちゃと喋つていたが、鳥のさえずりが聞こえ始めた朝には消えていた。マサイ族とは粹な種族である。



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦日珠心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜世子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

(松浦市出身)